

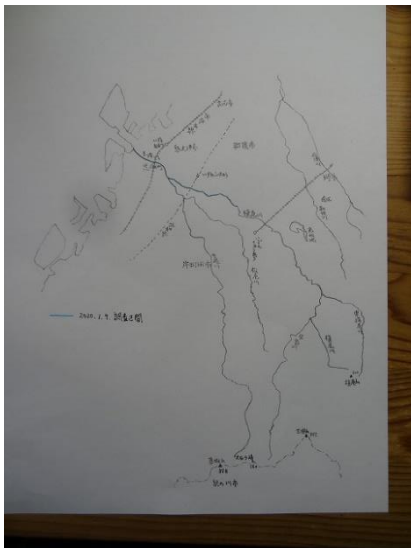
## 日本あちこち河川遡行記（第307回）

### 大阪-4.大津川

#### 大阪 4-1. 槇尾川（その1）前半 令和2年1月7日（火）小雨のち曇り

新年最初の遡行に出かける。泉州二番目の川「大津川」を目指す。あいにくの雨で南海本線泉大津駅から開始するか、阪和線和泉府中からレンタサイクルでの輪行にするか迷う。雨中での自転車走行はやりたくない。低気圧が日本海を東進しているので岡山よりも南にある泉州は本曇りか小雨だろうと判断して阪和線に乗る。

泉州には数多くの市と町が海沿いに連なっており、いまだにその順番が覚えられない。埼玉県の高崎線沿いの市と同じである。今日は泉大津市と忠岡町そして和泉市を歩くので、堺市の次の市「高石市」を飛び越えてしまう。折角なので高石市内の阪和線の駅「富木」で一旦下車し、マンホールを見ることにする。阪和線電車の中吊りに前面をパンダ風に化粧した紀勢線特急「くろしお」の写真が面白いのでカシャ。白浜のアドベンチャーワールドは多くのパンダを繁殖させたパンダ王国なのだ。



01.今回調査区間位置図



02.紀勢線特急「くろしお」にパンダが登場

小雨の降る富木駅前では早速マンホールが出迎えてくれる。羽衣を纏った天女とその周りを松葉と波が囲んでいる。浜寺の海と松原と地名の羽衣をミックスした絵柄である。

駅入り口には市の地図と沿革が紹介されている。かつての浜寺海水浴場は埋め立てで跡形も無いようだ。3分の訪問でホームに戻ると関空特急「はるか」が

疾走して通過する。関空からは何度も海外に出かけたがこれには 1 回だけ乗車したことがある。すぐ次の電車に乗り込む。



03. 富木駅で下車し高石市の絵柄をゲット



04. 駅前に有った高石市の歴史と地図



05. 関空特急「はるか」が通過

小雨の残る和泉府中駅に降り駅前の観光案内所に向かう。駅の建物は瀟洒な造りで駅前広場を跨ぐデッキの通路も広い。



06. 「和泉府中」駅舎とペディトリアンデッキは立派

案内所に市のマンホールのカラーバージョンが展示されマンホールカードも配布してくれる。多くの蓋の写真を撮ってきてカードが有ることは知っていたが本物を入手するのは初めてである。テレビで車に乗り全国のマンホールを巡り写真を撮り本を出している夫婦を紹介していたのを思い出す。今やマンホール蓋巡りは趣味対象になっている。当方は隠れた先駆者だぞー。

係りの女性が「もう一つの絵柄も有るんですよ」、「どこに?」、「直ぐ近くの南都銀行の前に有ります」。お土産を買い直ぐ近くの市の駐輪場に向かうと有りました、違う絵柄のヤマセミが川を見つめている物が。こちらは雨水用で市の花の水仙よりもこちらを推薦します。



07.和泉市の絵柄は市の花水仙



08.こちらは雨水枡のマンホールだ

大きな駐輪場で電動アシスト自転車を借り出発すると何と雨が止んだ。今年は春から縁起が良いわいなー。府道 30 号に出て南に向かう。今日はここから河口まで逆遡行をし、河口部で U ターンし川の反対側を遡行することにする。

やがて川が現れ川沿いの道に入り西に向かう。阪和線の下を潜り進むと泉大津市に入る。和泉国の国都の外港としての役割があったので泉の港、津を付けた地名である。古代ローマに対するオスティアのようなものだ。

早速マンホールが現れ、絵柄はふさふさの毛を持った羊が 2 頭描かれている。泉州と言えば玉ねぎ、繊維産業、あんかけの時次郎であるが、泉大津は毛織物の産地で特に毛布が有名である。その元の羊が市を代表しているぞ。



09.毛織物の産地「泉大津市」は羊だ

右岸を進むと南から川が合流してくる。ここから河口までの **2.5km** が大津川で、二つの川の北側が「槇尾川」、南側は「牛滝川」である。どちらの川も大津川とは名乗っていない。どちらも同じような流量で本家が名乗れないようだ。



10.「大津川」はここまでで川は二手からやって来る

南海本線の手前まで来ると土手沿いの道が無くなり仕方なく川を離れ迂回する。高架の南海線を越え小さな毛織物工場の中の狭い道をうろうろしながら土手を探す。反対側になんとかたどり着き橋を見ると今度は南海の関空特急ラピートがやって来た。こちらも二度ほど乗った記憶がある。



11.南海本線の関空特急は「ラピート」、鉄仮面だ

[ 続く ]